

奥田孝晴・藤巻光浩・山脇千賀子編著  
『新編 グローバリゼーション・スタディーズ』

(2008年、創成社)

評者：松居 竜五\*

本書は、現在の世界を考える上で不可欠な概念であるグローバリゼーションについて、文政大学国際学部を中心とする研究者が17章にわたり多角的に論じたものである。主に、国際学を学ぶ学生などの初学者に読まれることを想定しており、その方針に沿って「入門案内書」としてわかりやすく編集されている。各章にはかならず「キーワード」、「ディスカッションのために」、「リーディング」という学修のための見取り図が付けられていて、教科書として使いやすいようにという工夫の跡が見られる。

内容的にも、1492年のコロンブスのアメリカ大陸到達をどう見るか、というグローバリゼーションに直結する問題から話を説き起こし、政治、経済、ジェンダー、市民社会、博覧会、環境、情報、食文化、音楽、共生、独立運動、慰霊、国際協力といった、今日の世界を考える上で重要な切り口を一渡り概観できるようなしくみとなっている。最後にきちんと索引が付けられている点も、隅々まで行き届いていて好感が持てる。一般に学部を中心とした入門書作りは、各教員の論文の寄せ集め的なものになりがちであり、その意味で全体の方針に沿って丁寧に作り込まれた本書の完成度は、これまで刊行されたものの中では画期的とさえ言えるように感じられた。

\* 龍谷大学国際文化学部准教授

評者は本書とほぼ同じような領域を扱う国際文化学部の教員として、学生に対してこうした切り口をどのように教えるかに日々苦心している。また、同僚とともにそのための教科書作りを現在進行でおこなっている最中であり、本書のような先達に出会えたことを嬉しく感じるとともに、その高水準の出来映えに対しては、少々うらやましさを覚えたことを告白しておかなければならない。

しかし、おそらくこの場で評者が期待されていることは、本書が当然受けるべき賞賛の言葉を並べるのではなく、むしろ少々わがままな態度であら探しをして、可能な限りでの疑問点を提示することではないかと思われる。そこで、以下、やや強引な印象批評であることを自覚しながら、いくつかの問題提起を試みることにしたい。

まず通読して感じた疑問は、なぜほとんどの章に写真や図などが入っていないのかということであった。もちろん、単に物理的な制約があっただけかもしれない。しかし、本書が専門書ではなく、初学者に対する入門のための本であるということからすれば、まずは問題に対する関心を喚起すること自体が重要であろう。そのためには、利用できるものは利用するという姿勢を取った方がよかったのではないだろうか。まして、グローバリゼーションという文化のさまざまな層にわたる現象にアプローチする際には、言葉だけではなく視覚的に認識すべき点が多いはずである。特定の章に図版が偏るのではなく、たとえば各章に一・二点、象徴的な図版が入っていれば、読者の目を引きつけ、結果的にそれぞれの議論への導入をスムーズにすることにつながったであろう。

このことは、いくつかの章での議論がやや内容的な物足りなさを感じさせることと、無関係ではないと思われる。ポスト・コロニアリズム

やカルチュラル・スタディーズにおける重要な論点をまんべんなく紹介しようという意図は、たとえば「リーディング」欄を見ればよくわかる。しかし、本文の中で示される具体例そのものにも、ともすれば独自のフィールドワークや文献的な調査の成果と言うよりは、既存の議論の中で繰り返されてきた定型的な事象の紹介が多い傾向があることは、読んでいて少々残念であった。それは、初学者を議論の中に巻き込み、ともに学ばせるという意味での説得力を減少させてしまっているように見受けられるからである。グローバリゼーションという巨大で、輪郭があいまいで、はっきりとした定義を持たないものを対象とすればこそ、現実の中の生の声や生の事象に向かう細部への視線にこだわる必要があるように、評者には感じられる。

たとえば、個々の事象が生起する「現場」に対する視線をつよく打ち出しているはずの第Ⅱ部のうちの、第8章での屋久島でのエコ・ツーリズムの実態、第9章で参考として挙げられているいくつかの映画での情報というものの扱われ方、第10章での食文化をめぐる実際の文化交錯のありさま、第11章のワールドミュージックのビジネスにおける現状、などはもっと一つの具体例に固執しながら掘り下げた分析が欲しかったところである。これは、「東京トラジ会」という対象から多文化社会の共生への道を論じている第12章や、ガンジーという固有名詞からインドや現代社会への問題点を摘出している第

13章、国家による「死」の管理に対する筆者自身の思いがあふれた第14章が、まさに概論としては多少均衡を失っているがゆえに、個々の事象の細部に向かう視線を際立たせ、結果として読み手を巻き込む説得力を持っていることと好対照である。

こうして見てくると、通史的な論点を中心とした第Ⅰ部を先にして、個別事象を中心とした第Ⅱ部を後にした構成が、単なる通読には適さないという点も指摘されるべきかもしれない。グローバリゼーションという潮流の中で、終章に書かれたように「『大切なもの』が見えるものとなるように」ためには、あくまでそれぞれの読者が自分の足場から始め、現実の人々の声や個別の事象の分析を通して総体的な理解にたどり着くしかないからである。そのためには、第Ⅰ部で論じられている全体的な問題意識は、個々の事象に対する問題意識を持った上で読まなければならない、意味を持たない面がある。つまり、第Ⅱ部から第Ⅰ部への往還が必要なのである。

おそらくその往還は、このテキストを用いて授業がおこなわれると想定すれば、そうした場の中で、その都度ごとに可能になることであろう。評者も、そうした授業用に、この本を使わせていただくことがあるかもしれない。だが、本書を独立した一冊の書物として通読する際には、第Ⅱ部を読み終わった後で、もう一度第Ⅰ部に立ち帰ってみる用心深さが必要かもしれないと、ふと思った次第である。